

2001年度（第3回）学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」

総 評

石 川 康 宏

今年は7編の論文応募がありました。受付順に紹介すると「日本女子大と平塚らいてう」（田中早苗さん）、「『或る女』論—目覚めかけた女と作者の意図—」（古田敦子さん）、「『道草』『半日』の家庭—〈強い妻〉と〈強い女〉—」（芳野祥子さん）、「現代医療についてのしろうとのイメージ—K女子大生へのインタビューを通して—」（山王美恵子さん）、「現代青年の性役割観と『親準備性』、『子どもを持つことの意識』との関連について」（久保田真央さん）、「女性の人間としての選択権」（椿優菜さん）、「女性研究者として生きる」（高井美佳さん他5名）となります。

応募論文数は前回の2編から大きく増えました。また卒業生・院生からの応募が多いなかで、椿さんは学部の1年生です。「果敢な挑戦」に心から拍手を送りたいと思います。

論文審査については今年も論文1編につき3名の審査担当者を決め、この担当者の評価を本インスティテュートの「選考委員会」が総合し、最終評価を下すという方法をとりました。

その結果、今回は、論文「『或る女』論」と「『道草』『半日』の家庭」がそれぞれ優秀賞に選考されました。古田さん、芳野さん、おめでとうございます。いずれも優秀賞にふさわしい力作でした。以下、それぞれの論文に対する「選考委員会」での議論を、研究の発展への期待も込めて簡単に紹介しておきます。

「『或る女』論」は、主人公・葉子が有島のいう「自覚に目覚めかけた女」であり、そういう女を主人公において男尊女卑の現実を描いたところにこの作品の意義を見いだそうとするものです。論旨は明快で、論文の構成力も手堅くしっかりしています。しかし、有島の意図が作品に反映しているかどうかを問うとする方法では、有島自身の女性観が分析の視野から外れてしまい、結果として作品論としての幅が狭くなっているという意見もありました。ぜひ考えてみてください。

「『道草』『半日』の家庭」は、妻を中心にこれらを読み、そこに法的・制度

的な女の地位の低さを裏切る「しぶとさ」を身につけた〈強い女〉の歴史的登場を見いだそうとしたものです。〈強い妻・強い女〉という新しい視点の積極的な提示は魅力的です。しかし、他ならぬその「女」が男性に描かれた「男からみた女」であることへの自覚は十分か、また「作品中に描かれた女」と歴史に生きる現実の女をあまりに安易に同一視してはいないかという意見もありました。次へのきっかけとして下さい。

他の応募論文についてですが「日本女子大学校と平塚らいてう」は着眼の面白さに、いまだ分析の深みが届いていないと思われます。「現代医療についてのしろうとのイメージ」についてはオリジナリティの希薄さが指摘されます。「現代青年の性役割観と『親準備性』、『子どもを持つことの意識』との関連について」はテーマとデータ分析とのつながりの曖昧さが目につきました。「女性の人間としての選択権」は女の生きかたへの不当な制約に対する憤りを、まだ学問的な営みに結ぶことができていないと考えます。「女性研究者として生きる」には日頃の実践にもとづく強みと共同研究ゆえのまとまりのなさが併存していると受け止めました。

今回は最優秀賞の該当作がありませんでしたが、その根底には「女性学」や「ジェンダー研究」の今日的な到達点と自分の論文のかかわりに対する、応募者の自覚の希薄さという問題があるように思います。成長の過程にある「女性学／ジェンダー研究」に対して、自分はこの論文をつうじてどのような一石を投げようとするのか。その問題意識が明白であれば、個々の具体的な事例を扱う論文の中にも「スケールの大きさ」は自ずと貫かれるのではないのでしょうか。ぜひ一度、深く考えてほしいところです。

次回もまたたくさんの応募があることを心より期待しています。

(女性学インスティテュート学生懸賞論文選考委員)

〈学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」〉

本学学生（学部生・大学院生）及び前年度の本学卒業生・修了生が執筆した、女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文が賞の対象となる。最優秀賞論文（1編）には5万円の賞金及び賞状、優秀賞論文（2編）には各2万円の賞金及び賞状が授与され、最優秀賞論文については当インスティテュート発行の『女性学評論』（年1回：3月発行）に全文が掲載される。

2002年度（第4回）論文募集の締切は2002年7月24日。選考結果の発表及び表彰は2002年10月中旬の予定である。詳細は当インスティテュートまで。